

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名

中川 拓哉

論 文 題 目

国際映画制作におけるドイツ山岳映画の影響

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	中村 靖子
委員	名古屋大学教授	宮原 勇
委員	名古屋大学准教授	北村 陽子

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の概要〕

本論文は 1930 年代に日本で制作された「国際映画」と呼ばれる映画を対象とし、映画を通じたナショナル・イメージ構築について考察することを目的としたものである。「国際映画」のなかでも、本論文が取り上げるのは主に、日独共同制作となった『新しき土』と、『新しき土』の後継作とも言える『国民の誓』である。

第 1 章では国際映画をめぐる国策の推移を確認しつつ、国際連盟脱退後の日本が、国際社会に向けていかなる日本像を発信すべきかをめぐる議論を追った。ドイツ山岳映画の代表的監督アーノルト・ファンクを迎えて国策映画第一号とも言える『新しき土』が制作され、この映画自体も火山を舞台とするなど山岳映画の特色を持つゆえに、第 2 章では、西欧において、山岳映画というジャンルが生まれる思想的背景詳細に追っている。『カリガリからヒットラーまで』で有名なジークフリート・クラカウアーはファンクの山岳映画を「極めてドイツ的」と評したが、本章では 17 世紀に遡り「自然風景」が鑑賞の対象となったという美学的経緯から説き起こし、バークやカントの「崇高」論、アルプスを初めて文学的テーマとした解剖学者アルブレヒト・フォン・ハラールの詩集『アルプス』（1729）が果たした役割を確認するなど、山岳映画以前の山岳をめぐる表象の思想史的展開を明らかにした。ファンク自身がカメラマン出身であり、スキーヤーたちの映像記録から出発したという経歴を指摘しつつ、ファンクの目的はあくまでも自然美を描くことにあったにもかかわらず、ファンクは人間のいない風景そのものに関心をもっておらず、だからと言って山を舞台とした人間的なドラマを描くことにも主眼を置いていなかったというパラドキシカルな事情も指摘している。というのも、長らく交通の難所であったアルプスは、雪で覆われた危険な場所であり、人間が足を踏み入れる場ではなかったが、ファンクはこの雪に閉ざされた高山を、最新の技術を駆使した撮影法とスキーというスポーツによって近代的なリズムやテンポと結びつけ、限界に挑戦し自然を踏破する男たちの英雄的な行為が展開する場として描いたのであり、それは同時に、山岳に「自己発見の場」という役割を付与したと論じた。

第 3 章では、『新しき土』について、この映画に託された文化的・政治的使命を明らかにしつつ、共同監督として伊丹万作が指名されたものの、最終的にはファンク版と伊丹版という二つの版が作られたことに示されるように、ドイツ人から見た「日本の美」と、日本人として海外に発したい「日本の美」との齟齬を論じた。第 4 章では、『新しき土』の公開（1937 年 1 月）から盧溝橋事件（1937 年 7 月）を挟んで『国民の誓』（1938 年 6 月）に至るまでの「国際映画」が終息していく次第を論じた。『国民の誓』は、野村浩将監督作であるが、原作と撮影は、『新しき土』のチーフ・カメラマンを務めたリヒャルト・アングストであり、1940 年に予定されていた札幌オリンピックに向けた訓練のため、雪山にこもって訓練するという設定において、トレーナーの

## 論文審査の結果の要旨

「指導性」や「聖なる目標」を至上とする描き方は、「いかに日本を表現するか」という国際映画本来の課題を放棄したものだ」と論じた。

[本論文の評価]

本論文は、1930年代に制作された二つの国際映画を主な対象として、日本が国際社会に向けていかなる「日本像」を発信しようとしたかを明らかにしようとしたものである。本論文は、西欧対日本、近代対伝統という二項対立的な図式をあえて利用しつつ、当時日本がおかれた文化的・政治的状況を踏まえて、国による統制が次第に厳しくなっていく過程や国際映画をめぐる日本の知識人たちの意識変化を丁寧に追った点で評価できる。また、最初の日独共同制作となった映画が、「極めてドイツ的」と評された山岳映画というジャンルをモデルとしたものであったが、山岳映画の生みの親と言われるファンク監督がロケ地に選んだのは、ドイツ国境外であるアルプスであり、本来山岳映画は決してナショナルなアイデンティティを志向したものではなかったと指摘した点は評価された。そして西欧における山岳表象の思想的展開を踏まえ、危険で恐ろしい場所ではなかった雪に覆われたアルプスが、スキーというスポーツの登場と共に、男たちの挑戦の場、命を賭けた踏破といった英雄的行為の場となったと論じ、ファンクの山岳映画はあくまでも人間と自然との関係、しかも最新のテクノロジーを駆使して初めて可能となる関係に焦点を当てたものであると論じた点は本論の最も優れた点と言える。筆者によれば、ファンクの映画のストーリーはしばしば「メロドラマ」的であり、女性は雪山には入ることができず、かつ、男たちの友情を妨げる存在として描かれることも、こうした観点から説明される。その上で、映画『新しき土』では、西欧にはない「火山」を象徴的な舞台として選んだことにより、雪山のもっていた危険性が、火山と火山が引き起こす地震の危険性へと置き換えられ、重工業を支える動力のメタファーとして用いられていることを指摘し、ファンク映画にとっても『新しき土』は新しい試みであったと論じた点は評価できる。

課題としては、ファンクの山岳映画が「ナチの精神と同種のメンタリティに根ざした」と見なされたことについて、ファンクの弟子であるレーニ・リーフェンシュタールのその後の監督としての活動を思えば、やや議論が物足りないものになっていること、カントの崇高論についてもやや表面的な言及にとどまっていること、同時代のエイゼンシュテインの映画などによる影響についての考察がないことが指摘された。それらの論点は今後、検討されるべき課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。